

日本語アカデミック・ライティングにおける
専門分野間の言語表現・表現技法の異同
—言語学分野と文学分野を取り上げて—

安 祥希

要 旨

本稿は、人文社会系日本語アカデミック・ライティングの実態調査研究の一環として、言語学と文学という隣接領域を取り上げ、言語表現や表現技法の異同を明らかにしようとするものである。具体的には、複合辞、引用、体言/助詞止めに着目し、自作の論文コーパスを用いて、両者の異同を明らかにした。学習者に高度なアカデミック・ライティング能力を身につけさせるためには、分野間の異同も視野に入れた、実態に即した記述を行っていく必要がある。

【キーワード】 アカデミック・ライティング 複合辞 引用 体言/助詞止め

Differences in Representation and Techniques between
Specialized Fields in Japanese Academic Writing :
An analysis of Linguistics and Literature Fields

AHN Sanghee

【Abstract】 This paper aims to clarify the differences between the representation and techniques of linguistics and literature, which are related fields, as part of research on Japanese academic writing focusing on humanities and social studies. Using a corpus created by the author, this paper reveals the differences, which specifically focus on compound particles, quotatives, and endings with substantives/particles, between the two fields. It is necessary to deepen the analysis based on facts, with the differences between the two fields being taken into account, to equip learners with advanced academic writing skills.

【Keywords】 academic writing, compound particle, quotative, ending with substantives/particles

1. はじめに

日本学生支援機構による「平成28年度外国人留学生在籍状況調査結果」によれば、人文社会系を専攻する留学生は17万人を超えており、全体の約72%にも上る（下図参照）。

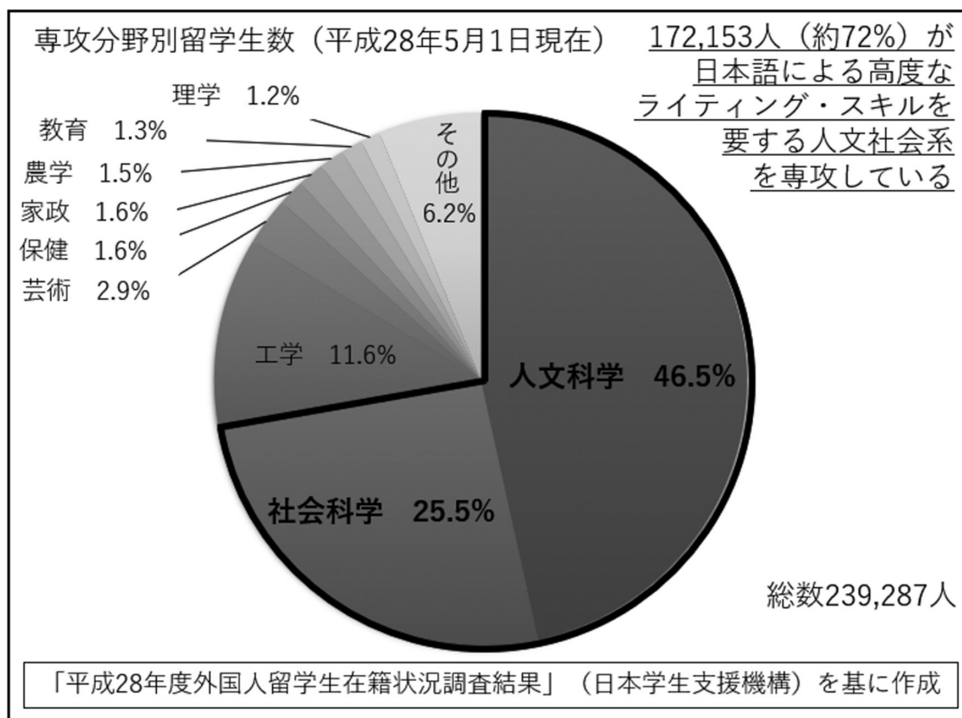


図1 専攻分野別留学生数

人文社会系を専攻する学習者は、他分野を専攻する学習者に比べ、日本語で論文を執筆することへの要請が高い（山本・二通 2015:94 など）。しかし、研究活動を維持し、母語話者と対等に渡り合っていくためには、各専門分野の論文で用いられる言語表現や表現技法を学ばなくてはならず、そのなかでも特に、研究活動において最も重要な論文執筆に用いる「書く」能力、つまり、アカデミック・ライティング（以下、AW）能力については、ネイティブと同レベルの高度な能力を身に付ける必要がある。

日本語 AW 能力において重要なのは、適切な表現を選択することに加え、それぞれの専門分野の作法¹を守っているかという点が挙げられる。しかし、学習者が志す専門分野と日本語教師が専門とする分野が異なる場合、作法の指導は極端に難しくなる。

この点について、教材を用いて一例を挙げる。

西川他（2017:8）には次のような記述が見られる。

○文章は基本形で書きましょう

・途中で終わったり、体言（名詞）で終わったりしない

上記の記述は、論文のような論理的な文章に、体言止めのような特殊な表現技法を用いるのは適切ではないという指摘である。確かに、文章を基本形で書くというのは、論文執筆の基本的な事項ではある。しかし、詳しくは後述するが、論文の本文に体言止めが用いられることはある²。

- (1) 「実現型」と「意識型」の分布パターンから、両者の関係性について検討する。
3類の結果を成分1について降順に示したものが図1。[lin.9.154-155]
- (2) 表現の主体は実は「花」の正体を知っているのだが、知りながら頑なに「花」の名を明かすまいとする。その修辞が強調する名を知りつつ名づけを拒む語り口。[lit.14.11-12]

「書く」という行為の学習は模倣から始まる。それは母語話者でも非母語話者でも同じであり、専門分野の学習の中で、その分野の作法を学び、模倣することがあるだろう。仮に、上記の体言止めが模倣による成果であるとした場合、日本語教師は、このような学習者の専門領域における自由な学びの萌芽に気付き、適切に導いていかななくてはならない。そのためには、専門分野における表現や作法の異同を、日本語教師自身がある程度把握しておく必要があるのではないだろうか。しかし、現状、そのような知見が提示されているとは言い難い。

以上を踏まえ、本稿では、上記の観点を取った研究の第一歩として、高度なAW能力を要すると思われる言語学と文学の2分野について、試論的に現在作成中の論文コーパスを用い、複合辞、引用表現の述部、体言止め文・助詞止め文に着目して、両分野の表現と作法の異同を明らかにすることを目的に議論を行っていく。

2. 先行研究と本稿の立場

村岡（2014）によれば、日本語AWに関する研究に、文法や語彙の正確さを重視する「制限作文アプローチ」に位置付けられるものは1980年代頃から見られるものの、学術上・職業上の関心を同じくするコミュニティで共有される学術論文を「書く」能力が着目され、それに関する研究が一定の成果を上げ始めたのは、2000年前後である。本節では、後者に関する研究のうち、本稿と関連の深い、村岡（2014）、佐藤他（2013）、二通他（2009）を取り上げ、本稿の立場を明らかにする。なお、本稿が着目する複合辞、引用表現の述部、体言止め・助詞止めに関する研究については、4節以降で適宜取り上げて行く。

2. 1. 先行研究

村岡 (2014) は、大学院レベルの AW について検討し、専門日本語ライティング教育に関する以下の問題点を指摘している³。

- (3) a. ジャンルに応じた文章表現の適切性の判断が不十分である。
- b. 引用の手続きおよび剽窃に関する正確な知識と日本語による適切な表示の能力が不足している。
- c. 段落と論理展開、および文章構成が適切に行えない。

(村岡 2014 : 64)

村岡 (2014) は、(3a) で述べている「ジャンル」について、「日常的に目にする実用的な各種説明書、新聞や雑誌の報道文、大学での単位取得に必要なレポート、あるいは企業の業務に必要な企画書や報告書」などを想定している。しかし、たとえば、大学での単位取得に必要なレポートであっても、専門分野によって許容される表現が異なる場合もあるため、村岡 (2014) のいう「ジャンル」をどのように設定すべきなのかについては、さらなる検討が必要であると言える。

佐藤他 (2013) は、人文科学分野、社会科学分野、そして工学分野における 270 論文を対象に、それぞれの論文の構造の型を分析し、同じ人文科学分野に属する専門分野、分析対象となっているものを例にすれば、人文科学分野に分類される日本語学、日本語教育学、日本文学など、であっても、構造型には大きな違いがあり、論文の構造型は、「分野によって決まる場合もあるが、研究主題や研究方法に応じて選定される」と主張している。隣接する専門分野における AW の相違に着目するという観点は本稿の立場と同様であり、また、専門分野間の文章構造の型の異同を明らかにしているという点で、非常に有益な研究であるが、佐藤他 (2013) では、専門分野間の言語表現や表現技法の異同については触れられていない。

専門分野を問わず用いることのできる表現を集めた用例集に二通他 (2009) がある。二通他 (2009) は、留学生・日本人学生のための参考書として、レポート・論文のタイプ別の構成、アウトライン作成までのプロセス、さらに、実際の学術論文内でどのような文型がどう用いられているかといった情報をも提示している非常に有用な教材である。しかし、一般性の高い情報を、学習者を含む初学者全体に向けて提示しているため、専門分野を問わず使用できるという利点がある一方で、各々の分野における特徴を見出しにくくなっているようにも思われる。

以上より、学習者の AW 能力をより高度な次元にステップアップさせる教育を実現するためには、専門分野間の異同を明らかにしておく必要があると考えられる。

2.2 本稿の立場

2.1 節で概観したように、これまでに、専門分野に共通する言語表現を抽出するということは行われている。しかし、専門分野やジャンルによって文章表現の適切性や文章の構造型が異なることが指摘されていることを考えると、言語表現や表現技法についても専門分野間の差異がある可能性は十分にある。

専門分野間の異同を見るためには、専門分野を問わず用いられる言語表現に着目する必要がある。本稿では、下記の理由から、そのなかの複合辞、引用表現の述部、体言止め・助詞止めを取り上げることとする。

専門分野やジャンルを問わず文章の骨格を支える表現として、接続表現、文末表現、複合辞を含む助詞類などの機能語が挙げられる。このうち、接続表現は文章・談話研究で、文末表現はモダリティ研究との関連のなかで、日本語学・日本語教育学ともに多くの研究成果が蓄積されているが、助詞類、特に「格助詞」相当の複合辞に関しては、相当語句を抽出する作業や日本語学的な分析は積み重ねられてきたものの（森田・松木（1989）、グループ・ジャマシイ（1999）、藤田・山崎（2001）、近藤他（2011）など）、それらの使用実態については、接続表現や文末表現ほど明らかになっていない。

名詞や動詞、形容詞などの実質語は専門分野によって用いられる語が大きく異なることが予想される。しかし、特定の環境、特に文法的な環境で用いられる語に限定すれば、その違いは縮小し、本稿の目的である専門分野間の異同を見出すことが可能となる。本稿では、その環境として、AWにおける重要項目の一つである引用に着目する。引用は、現在、特に日本語教育分野において、多くの研究が行われているテーマであるが（二通（2007）、山本・二通（2015）など）、言語表現の異同という観点で述部動詞について取り上げることはそれほど多くない。

体言止め・助詞止めについては、上述の西川他（2017）のような指摘は見られるが、論文でどのように用いられているのか、そもそも用いてよいものなのかを論じた研究は、管見の限り見られない。

以上を踏まえ、本稿では、言語表現や表現技法に専門分野による違いがあるという観点から、言語学と文学の2分野を取り上げ、複合辞、引用表現の述部、体言止め・助詞止めに着目して、両分野におけるAWの異同の一部を明らかにする。そして、村岡（2014）のような「ジャンル」の捉え方や、二通他（2009）の専門分野を問わず用いることのできる表現だけを抽出するという手法の限界を示し、言語表現や表現技法に関しても、佐藤他（2013）が指摘するような、研究主題や研究方法に応じて選定される場合が存在することを指摘する。

3. 資料について

本稿では、言語学と文学の2分野におけるAWの異同を調査するために、両分野における全国レベルの学会誌に掲載された学術論文をコーパス化したものを資料として用いる。データとする学術論文は、1) 学会名鑑に登録されている会員数が1,000名を超える学会が発行している学術雑誌、2) 2000年以降の任意の年に発行されたもののうち、テキストデータとして入手可能なものを対象とした。発行年を2000年以降としたのは、たとえば、国立国語研究所が提供する『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCJW)』においても、1985年以降が現代語とされており、2000年以降であれば使用される語彙や文法、作法が大きく変化するとは考えられず、テキスト化された資料も増えてくるためである⁴。

具体的には以下に記す2誌に掲載された(展望論文、研究ノートなどを除く)学術論文を対象とし、コーパス化作業を行った。

表1 コーパス化の対象とした資料の詳細⁵

	雑誌名	巻号	発行年	総論文数
言語学分野	『国語学』	51-1、51-3	2000	12
文学分野	『日本近代文学』	88、89	2013	18

言語学分野、文学分野であっても、たとえば、英語学や英米文学では日本語で論文を執筆する要請は低くなると考えられるため、言語学からは日本語学分野の『国語学』、文学からは日本文学分野の『日本近代文学』といったように、日本語による論文執筆の要請が高い雑誌を選択した。

上記の論文は、節タイトル、注などを含む本文すべてを一文一行形式に加工し、専門分野(lin(guistic) / lit(erature))・論文番号(掲載順)・本文番号を付して整理した。また、各文には「節タイトル」「本文」「引用」「用例」「注」「付記」などのタグを付けている。本稿の調査では、本文タグの付いた文のみを調査対象とした。結果、調査対象となった文数は、言語学分野1,967文、文学分野3,129文である。

以上を資料とし、次節では、複合辞、引用表現の述部、体言止め・助詞止めを取り上げ、言語学と文学におけるAWの異同について考察を行っていく。

4. 言語学と文学における言語表現と表現技法の異同

言語表現については、二通他(2009)のように専門分野を問わず用いることのできる表現を示すことが有効なものと、反対に専門分野間の差異を示すことが有効なものがある。

本節では、前者の例として複合辞を、後者の例として引用表現の述部を、それぞれ4.1節、4.2節で取り上げる。また、表現技法に関しては、体言止め・助詞止めに注目し、専門分野別の異同について述べる。これらは、西川他(2017)を取り上げて確認したように、論理的な文章で使用するのには適切ではないと考えられているものである。4.3節では、学術論文における体言止め・助詞止めの使用実態を確認した上で、これらが無秩序に使用されるのではなく、限られた環境でのみ用いられることを示す。

4.1 複合辞について

「複合辞」とは、「として」「について」「うえで」などのような、複数の要素が一つのまとまりを成して辞(機能語)としての意味・機能を担うものである。個々の複合辞やその定義については、特に日本語学分野で多くの研究が蓄積されているが、相当語句を総体的に提示した研究として森田・松木(1989)やグループ・ジャマシイ(1999)、藤田・山崎(2001)があり、それらを踏襲した最新の成果として近藤他(2011)が挙げられる。これらの研究は、日本語学分野で複合辞と定義される要素のみならず、それ相当と考えられる要素が豊富な用例とともに取り上げられているが、それがAWにおいてどのように用いられているのかについては明らかにされていない。

本稿における調査では、上述した論文コーパスから、近藤他(2011)に「格助詞」相当の複合辞」としてリストアップされている108種の複合辞を抽出した⁶。抽出には、テキストエディタ「サクラエディタ 2-2-0-1」のGrep機能を使用した。手順としては、108種すべてを文字列にて検索し、抽出した用例について、近藤他(2011)の「格助詞」相当の複合辞」に該当するかを、文脈を確認しながら、手作業で判断した⁷。

以上の手順を経て抽出された複合辞を表2に示す。なお、両専門分野に共通して見られた複合辞については、網掛けで示している。

表2に示したように、言語学分野での使用が確認された複合辞は33種、文学分野での使用が確認された複合辞は44種である。そのうち、両専門分野での使用が確認された複合辞(網掛け)は27種である。調査対象とした両専門分野の論文数、文数(言語学分野:12論文・1,967文、文学分野:18論文・3,129文)の差を考えると、表2における異なり語数と総頻度の差は、調査対象とした資料の量の差に還元できるものと思われる。

個々の語を見てみても、高頻度複合辞はほぼ共通していることがわかる。また、低頻度複合辞に関しては、言語学、文学それぞれでだけ使用されたものも散見されるが、共通して使用されるものも多い。ここでは、文学でのみ確認された低頻度複合辞の用例をいくつか見てみる。

表2 分野別複合辞とその出現頻度

言語学				文学					
複合辞	頻度	複合辞	頻度	複合辞	頻度	複合辞	頻度		
として	257	にあたって	2	として	592	末に	3		
について	202	に至って	1	によって	202	につき	3		
において	159	をめぐって	1	において	173	なくして	3		
によって	77	に応じ	1	について	151	をもって	2		
に対し	48	に反して	1	に対し	59	からして	2		
に関し	31	に及んで	1	によれば	39	うちに	2		
によれば	21	にて	1	とともに	34	に従い	2		
により	20	にかかわらず	1	にとって	31	に至って	2		
にとって	13	としたことが	1	を通して	23	に及び	2		
間に	11	からして	1	間に	20	に応じ	2		
を通じて	8	うちに	1	により	19	にして	2		
上で	7	△		を通じて	14	にて	1		
に比して	7			をめぐって	14	折に	1		
にかけて	7			に関し	11	へかけて	1		
をもって	6			を介して	10	に比して	1		
からすれば	6			にかけて	9	に反して	1		
に際し	5			に至るまで	6	に代えて	1		
によると	4			上で	5	に先立って	1		
にして	3			にあたって	5	に先立ち	1		
に従い	3			にあつて	5	に乗じて	1		
にわたり	2			によると	5	にあたり	1		
にわたって	2			に際し	4	でいえば	1		
総頻度	911			異なり語数	33	総頻度	1,471	異なり語数	44

(4) そうではなく、「蒲団」は、男師匠と女弟子の、一つの素材を誰がいかに書くのかという、〈作者〉をめぐり苛烈な攻防の末に成立した小説であった。[lit.3.183]

(5) このような「言葉に対しての修練」(有明)なくして、『若菜集』の成功はなかったに違いない。[lit.10.143]

(4)の「末に」や、(5)の「なくして」が言語学分野で用いられるとしたら、「松下大三郎は度重なる修正の末に、ようやく独自の文法体系を築き上げた」や「現在の学校文法は橋本進吉の偉業なくしては語れない」といったような、個々の人間が研究対象となる研究史などの研究テーマに限られるように思われる。これは、佐藤他(2013:96)が、論文の構造型について述べている、「論文を書く場合には、分野よりも研究主題と研究手法に即した構造型を見極めることが求められており、援助者が書き手の適切な構造型選択を促すためには、IMRAD型に限定されない多様な構造型の存在とその分布状況を知る

ことが必要」という点が、言語表現にも当てはまることを意味している。すなわち、研究主題と研究手法によって、使用可能な言語表現も変化するのである。

しかし、立場を表す「として」、手段を表す「によって」「により」、立場を表す「において」、対象の内容や事柄を表す「について」、仲介・手段を表す「を通じて」などの複合辞は、どの専門分野にも見られる論旨や立場の表明、文献や先行研究の導入・紹介で用いられるといったように、専門分野間の差異よりも共通性の方が際立つ。

したがって、複合辞のような機能語に関しては、二通他（2009）のように専門分野を問わず用いることのできる表現を示すことが有効であると考えられる。

4.2 引用表現について

「引用」はAWにおける重要項目であり、二通（2007）が学習者の様々な問題を指摘しているように、日本語教育における重要な課題の一つとして位置付けることができる。AWにおいて「引用」は、「元論者の文言や内容を当該の論の中で紹介するという行為（清水 2010）」を指し、この場合は、「によると」など述語動詞を伴わない要素も含まれるが、本稿では、引用に用いられる最も典型的な引用助詞「と」と述部で構成される文型を取り上げ、専門分野間の言語表現の違いによって異同が現れることを明らかにする。

調査では、「茶筌 (ChaSen) version 2.1 for Windows」を使用して3節で述べた論文コーパスに形態素情報を付与し、テキストエディタ「サクラエディタ 2-2-0-1」のGrep機能を用いて、「と_助詞/格助詞/引用 [任意の要素]_動詞」という文字列に該当する部分を取り出すことで、当該の文型の抽出とした^{8,9}。

上記の調査によって得られた動詞を以下、表3～表5に示す。表3～表5では、思考（「考える」「思う」など）、発話（「言う」「述べる」など）、書記（「書く」「記す」）を含む動作を表すと解釈できる動詞に網掛けを付している¹⁰。

表3 言語学・文学両専門分野で確認された動詞¹¹

いう (147/174)、考える (100/55)、言える・いえる (51/50)、見る・みる (49/18)、 する (40/75)、思う・おもう (34/21)、言う (26/53)、呼ぶ (14/18)、捉える・とら える (13/18)、述べる (12/43)、なる (12/19)、ある (6/11)、書く (3/8)、比べる (3/4)、 結びつける (3/2)、位置づける・位置付ける (3/4)、感じる (2/2)、似る・にる (2/2)、 置き換える (2/1)、論じる (1/4)、関連づける (1/2)、説く (1/2)、あわせる・合わせる (2/1)、 称す (1/1)、問う (1/1)	計 25 種
---	--------

※括弧内は左が言語学分野の頻度、右が文学分野の頻度

表4 言語学でのみ確認された動詞

解す (6)、尋ねる (2)、おぼす (1)、よる (1)、引き継ぐ (1)、云う (1)、解する (1)、 解せる (1)、近づく (1)、思える (1)、綴る (1)、伝へる (1)、分かれる (1)、分ける (1)、 紛れる (1)、聞き取れる (1)、別れる (1)、訳す (1)	計 18 種
--	--------

表5 文学でのみ確認された動詞

語る (16)、記す (12)、思ふ (12)、題す (7)、見なす・みなす (7)、いふ (6)、試み る (4)、評す (4)、話す (4)、名づける・名付ける (4)、繰り返す (3)、言い換える (3)、 考へる (3)、至る (3)、答える (3)、認める (3)、いる (3)、振り返る・ふりかえる (3)、歌う (2)、起す (2)、結びつく (2)、見える (2)、向かう (2)、始まる (2)、思 い込む (2)、重ねる (2)、信じる (2)、続く (2)、歎ずる (2)、断る (2)、眺める (2)、 伝える (2)、導く (2)、読み替える (2)、読める (2)、燃える (2)、くくる・括る (2)、 あきれる (1)、つながる (1)、ひきずりこむ (1)、わかる (1)、移す (1)、違う (1)、 引く (1)、応える (1)、化す (1)、改む (1)、覚え込む (1)、願う (1)、危惧す (1)、 戯れる (1)、恐れる (1)、駆ける (1)、結ぶ (1)、見なせる (1)、言い張る (1)、言 い聞かせる (1)、悟る (1)、行う (1)、差し戻す (1)、差す (1)、思いつく (1)、支 える (1)、死に別れる (1)、捨てる (1)、取る (1)、重なる (1)、出る (1)、出会う (1)、出掛ける (1)、称える (1)、称する (1)、信ずる (1)、心がける (1)、吹く (1)、 責める (1)、切り替える (1)、折り返す (1)、送り返す (1)、続ける (1)、題する (1)、 嘆く (1)、断ち切る (1)、知る (1)、聴こえる (1)、追い込む (1)、到る (1)、悩む (1)、 判る (1)、費やす (1)、付く (1)、憤る (1)、聞く (1)、併せる (1)、並ぶ (1)、閉 じる (1)、歩む (1)、望む (1)、名乗る (1)、落ちる (1)、謳う (1)	計 101 種
--	---------

本調査では、上述のように、論文コーパスにおける論文筆者が記したと思われる本文のみを調査対象としており、先行研究や資料等からの引用部分は調査対象外となっている。しかし、調査対象外となっている引用部分はブロック引用のみであり、引用構文を用いて導入された引用部、たとえば、「先行研究は、…と考えられる」と述べている」における「と考えられる」、などは表3～表5に含まれている。このような例を手作業で排除することは行っていないが、文学作品や資料からの引用部である可能性が高い旧字や現行のものとは異なる送り仮名などが用いられているものに関しては、表の中では斜体で示している。

まず、量的な側面を確認しておく。表4と表5を比べると、引用助詞「と」の直後に用いられている動詞の種類は、思考・発話・書記を表す動詞である網掛け部分に限ってみても、明らかに文学分野の方が多ということがわかる。この差を、複合辞の場合のように、調査対象の量的な差に還元することはできない。

では、何が原因でこのような差が生じているのか。

表3の網掛け部分を見てみると、「考える」「思う」などの思考そのものを表す動詞や、「言える」「述べる」などの発話行為、「書く」といった書記行為だけを表す動詞が両分野で共通して用いられていることがわかる。これらの動詞は典型的な引用動詞である。

(6) 誠は、こんにちわと言った。

(7) 恵美子は、困ったなと思った。(藤田 2000:28-29)

一方、表5における網掛け部分の動詞を見ると、文学分野でのみ用いられている語には、「断る」「言い張る」「嘆く」など、思考・発話・書記そのものだけでなく、その動作の様態を意味に含む動詞が多くあることが見えてくる。以下に、一部の例を示す。

(8) 松本清張自身は、「菊村さんの作品を知りません」と断っているが、読者の投書を見た後に、清張が「事件の成立」あるいは映画化作品を確認し、創作の違いを強調したことは推測しに難くない。[lit.8.176]

(9) それは「星とピエロ」における「銀河系」の「遠さ」と「神秘」を「ウソ」だと言い張る態度との間に確かな連続性を持っている。[lit.14.247]

(10) 作品世界においては、一九三五年に台湾中部地方で発生した大地震を経験した「ミーチャ」が、「台湾はもう海に沈んでしまうんですって……。」と嘆くのに対して、「ばかばかしいこと言うなよ。そういううわさがあるんだってね。でもそれなんか、流言蜚語の典型だ。今度の地震でどんな流言蜚語が起きたか、学生たちに調べさせようかな。」と「明彦」は笑って答える。[lit.18.98]

これもまた、複合辞の観察でも見られた、研究主題と研究手法による言語表現の違いと捉えることができる。すなわち、文学分野では、作家自身や作品内の登場人物が研究対象となることも多く、その人物の思考・発話・書記に伴う感情もその分析範囲に含まれるため、先行研究の引用や自身の主張を記す際に用いられる「述べる」や「考える」「言える」などだけでなく、様態を含む思考・発話・書記動詞も使用されるのである。それに対し、言語学分野では、すでに前節でも述べたとおり、研究史などの研究テーマを除き、著者個人を研究対象とすることが多くはないため、表4と表5のような差が生じたものと思われる。

また、文学分野では次のような表現も散見される。なお、本調査では、引用助詞「と」と述語動詞が隣接しているもののみを抽出しているが、ここでは、表には含まれていない、実際に用いられた用例も取り上げる。

- (11) 小説では「佐久間の父も、良樹の父に劣らない位、有名な実業家だつた。」(『キング』一九二八・一一、一一五頁)とされているが、映画では「佐久間——幼児より逆境と／闘つて来た彼は鋼鉄の意志と／炎の如き情熱に生きる。」と、階級的対立を前面に押し出す役割が与えられている。[lit.13.119]
- (12) 冒頭「何、あれはな、空に吊した銀紙ぢやよ」と始まって、〈俺〉は「銀河系」の「神秘」や「遠さ」が「学者共」によって「発明」されたものであることを執拗に語り聞かせ、自らはそれを「ウソ」と見做す。[lit.14.149]
- (13) たとえば、一篇は「年中借金取がはいりした。節期はむろんまるで毎日のことで」と始まり、「蝶子が毎日使つた」と閉じられる。[lit.16.109]

(11)～(13)は、砂川(1989:363-364)が「引用句に示される発言や思考という事態と、述語動詞によって示されるそれとは別の事態という異なった二つの事態が、単なる偶然の共存にとどまらず、それを超えた何らかの根拠のある結び付きによって同一場面的に共存するという関係を成り立たせている」とする「事態共存型の引用文」である。このような表現も言語学分野ではあまり見られないが、(8)～(10)と同様に、言語学分野と文学分野の研究主題と研究手法による言語表現の違いで説明可能であると考えられる。

4.3 体言止めと助詞止めについて

体言止め文・助詞止め文は、動詞や形容詞、コピュラ、モダリティ、終助詞で終わらず、体言や格助詞で文が終わる次のようなものを指す。

- (14) 忘れることのできない光景。
(15) 子供に未来を。

上記のような体言止め文・助詞止め文は、一般的にAWには相応しくない、使用が望ましくないものとして扱われている。冒頭でも述べたように、西川他(2017)は、「途中で終わったり、体言(名詞)で終わったりしない(p.8)」とし、「基本形で書く」ことを規則とする。しかし、表6に示すように、実際には、全国レベルの学会誌に掲載された学術論文においてもその使用は確認される。

表 6 分野別体言止め文・助詞止め文の出現数

	言語学分野 (総論文数 - 12)		文学分野 (総論文数 - 18)	
	出現数	使用された論文数	出現数	使用された論文数
体言止め文	13	1	41	10
助詞止め文	0	0	8	5

言語学分野では体言止め文が 13 文確認されたが、論文数が示すように、1 編の論文で集中的に用いられていた。一方、文学分野では、体言止め文は、1 編の論文に集中して用いられているのではなく、複数の論文で使用されている。ここから、文学分野では、体言止め文の使用が規範から外れたものではないことがわかる。また、文学分野に関しては、言語学分野で確認されなかった助詞止め文も 5 編の論文で計 8 回の使用が確認された。これは、文学分野の方が修辭的な文を容認する傾向にあることを意味している。

しかし、文学分野においても、体言止め文や助詞止め文が無秩序に使用されているのかというと、そうではない。

まず、1 編の論文での使用しか確認されなかった言語学分野の体言止め文の使用法を見てみる。

- (16) データの学校別内訳は、表 1 の通り。[lin.9.56]
- (17) 外来語に関する項目は、調査 1 で「実現型」調査を別途行ったものと同じ 8 項目。[lin.9.88]
- (18) 個人全体を布置すると煩雑になるため、性・移動歴・学校の属性ごとに算出した平均値を成分 1 降順に示したものが図 2。[lin.9.147]

これらの用例は、表や図、調査方法の説明を述べている部分でのみ用いている。これは、1 人の筆者によるものではあるものの、言語学分野において、体言止めが特定の使用環境でのみ使用可能であるということを示唆している。また、本稿の調査では対象外としたが、「注」では「～を参照。」のような体言止めが複数の論文で散見される。ここから、言語学分野においても、特定の環境では、体言止めの使用が容認されると考えられる。

次に、文学分野における体言止め文と助詞止め文を見る。

【体言止め文】

- (19) 移動の体験は、しばしば個人のアイデンティティを大きく変容させる。慣れ親しんだ人々、風景、習慣、価値観、そして言葉。すべてが異なる地に、適

応して暮らしてゆく苦闘や混乱のなかで、気づけば自分と世界が一変している。[lit.9.2-4]

- (20) 対句は『万葉集』の長歌の特色でもあり、そのことは当時にも言及が見られる。特に虚舟生。「国民の歓声」(『少年園』明治27・12・3)では、今日の長歌、新体詩は「一種の散」文であるという問題意識のもと、『万葉集』巻一・三と巻二・一五九の長歌を引いた上で「対句の有様を示さん為に」図示もし、「巧みに対語を設けて務めて修飾を加へ」という「着眼点」を長歌、新体詩作者に提唱している。[lit.10.111-113]
- (21) これらは、明らかに童話・童謡の流行を受けての詩で、童謡と小曲という二つのジャンルが近かった、あるいは混同されていたこともうかがわせる。二つ目は、思い出をうたうもの。[lit.12.147-148]
- (22) 表現の主体は実は「花」の正体を知っているのだが、知りながら頑なに「花」の名を明かすまいとする。その修辞が強調する名を知りつつ名づけを拒む語り口。[lit.14.12]

【助詞止め文】

- (23) ところが、花袋の「蒲団」は、同じ恋愛事件を、まったく異なったタイプの〈女学生に煩悶する中年男〉の物語に仕立て替え、美知代が若い二人の恋愛の苦悩を彩るアクセントとして配した師の存在を花袋は中心化させた。美知代と静雄のドラマから、花袋と美知代のドラマへ。あるいは、ツルゲーネフの「ルージン」型から、ハウプトマンの「淋しき人々」型への転換である。[lit.3.131-133]
- (24) 先の場面では、言説と映像、そして上映形態の全てが洞窟の比喩そのままに上演されている。一つの光源と、投影されるイメージと。古代の洞窟は現代の劇場になる。[lit.5.60-62]
- (25) 「文彦」の死後、「やっと自分のものに戻ったとばかりに」「ミーチャ」の乳房を「手でもてあそ」び、半年ぶりに「ミーチャ」に「月のもの」が戻ったことを知ると、「ワイフの月のものって色っぽくて、やっぱり、いいものだな。これで安心したよ。」と「満足そうに笑」う「明彦」に、「ミーチャ」は「思わず叫び返」しそうになる。「わたしの月経はあなたのものじゃないのよ、勝手に喜ばないで。」と。[lit.18.156-157]

上記の体言止め文と助詞止め文は、主に、文献の紹介やその解釈、物語の成り行きを述べる場面で用いられている。言語学分野における図表や調査方法の説明とは異なるが、

文学分野でも体言止め文と助詞止め文のような修辭的な文は無秩序に使用されるのではなく、特定の文脈でのみその使用が許されると判断される。

5. おわりに

以上、本稿では、AW で用いられる言語表現と表現技法の専門分野における異同の一端を明らかにするために、言語学・文学の2分野を取り上げて、自作の論文コーパスを用いた調査を行い、複合辞、引用表現の述部動詞、体言止め・助詞止めの使用実態の違いについて分析を行った。

調査と分析の結果は、以下のようにまとめられる。

- 1) 複合辞については、専門分野間の差異よりも共通性の方が際立っている。
- 2) 引用表現と関わる述部動詞は、文学分野は多様であるが、言語学分野は限定的である。
- 3) 体言止め文・助詞止め文のような修辭的な文は、文学分野の方が容認する傾向にあるが、言語学分野でも文学分野でも無秩序に使用されるのではなく、限られた環境でのみ用いられる。

複合辞のように、専門分野間の差異よりも共通性の方を示すことが学習者にとって有益となるものもある。しかし、引用表現の述部動詞や体言止め・助詞止めのように、研究主題や研究手法がその使用に大きく影響するものも存在する。

このような差異は、学習者自身がそれを理解する必要はない情報ではあるが、佐藤他(2013)が述べるように、それを支援する者が把握していなければならないものである。

本稿は、試論的に言語学と文学の2分野、各分野ごと1誌のみを対象としているが、より実用的な情報提供、一般化のために、論文数を増やすとともに、同分野の異なる学会誌、加えて、人文社会系の他分野(経済学、教育学、史学など)の学術論文とも比較を行い、人文社会系における各専門分野の特徴を質的・量的に研究する必要がある。また、本稿では、3つの項目について調査を行ったが、それぞれの項目については、用例を精査していく必要がある。そのなかでも体言止め文・助詞止め文については、類似した表現で体言止め・助詞止めが使われていない用例との比較を行うことで、より一般性の高い記述ができると考えられるが、用例数の比較、用例の精査などは、今後の課題である。

さらに、本稿で取り扱った3つの項目に加えて、接続表現や文末表現なども視野に入れて検討することにより、AW全体における情報提示が可能になると考えられる。

付記

本稿は、筑波大学研究基盤支援プログラム (A タイプ) 「上級・超級日本語学習者のためのアカデミック・ライティングにおける複合辞指導のモデル構築」(平成 29 年度、研究代表者：安祥希) の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

注

1. ここでいう「作法」は、「各専門分野のアカデミック・ライティングにおいて使用が許容される言語表現や表現技法の範囲に関するきまり」といった意味で用いている。
2. 本稿で取り上げる用例は、すべて3節で詳述する論文コーパスから得たものである。また、用例の出典については、コーパス化の際に付した整理番号 ([専門分野・論文番号・本文番号]) で記す。なお、下線等の強調は引用者による。
3. 村岡 (2014) のいう「専門日本語ライティング」とは、「大学院レベルの研究留学生が、大学院在学中に必要とされる研究に必要なライティング活動のための教育 (p.145)」である。
4. 本稿で用いるコーパスは最終的には専門分野ごとに複数の雑誌を対象に、各専門分野における合計論文数が統一されたものを構築することを目標としている。論文数が統一されていないのは、作業中の現段階では、加工作業の効率を考え、2000年以降の資料でテキストデータを入手できるものから順に行っているためである。また、本調査で用いたものは、専門分野間で発行年が異なっているが、2000年以降を現代語と捉えているため、分析に大きな支障があるとは考えていない。
5. 『国語学』は国語学会 (現・日本語学会) の学会誌、『日本近代文学』は日本近代文学会の学会誌であり、前者は年4回、後者は年2回の発行である。今回使用した2000年の『国語学』は、年3回の発行であり、かつ、51-2が展望号であったため、51-1と51-3のみをコーパス化の対象とした。
6. 本稿で抽出の基準とした「「格助詞」相当複合辞」の他に、「「連体助詞・係助詞・副助詞・準体助詞」相当複合辞」、「文末複合辞」に分類されている。
7. 判断に迷ったものに関しては、日本語学を専門とする母語話者1名に文脈を確認してもらい、その判断に従った。
8. 「と」の品詞情報については、「茶筌 (ChaSen) version 2.1 for Windows」の判定に従っている。そのため、金 (2013) が「同一化のと」と呼ぶ「先生は参加者を男性と限った (p.68)」や「自身の過去と重ねる」のようなト格といった引用以外の「と」を含んでいる。また、本稿で対象としたいのは、他の文献から文言や内容を引用するものであるが、「と思われる」「と考えられる」といった論文著者の

判断を表す表現（早川他 2007 など）も含まれる。しかし、言語学分野、文学分野ともに条件は同じであり、また、両専門分野の言語表現の使用傾向の異同を見ることが目的であるため、大きな問題はないと判断し、この方法を採用した。これらに対する質的な研究は今後の課題とする。

9. 本調査では「茶筌 (ChaSen) version 2.1 for Windows」によって付与された「動詞」という品詞情報を用いて検索を行っている。そのため、「主張する」などのように「名詞 / サ変接続 する _ 動詞」という情報が付与されてしまうサ変動詞は含まれていない。サ変動詞に関する調査は今後の課題としたい。
10. 本稿の目的は、動詞の分類ではないため、思考・発話・書記行為が含まれていると解釈しても差し支えないものと思われる動詞にのみ、網掛けを付している。
11. 「いう」は「ということ」であることが多かったため、表 3 では、「言う」とは区別して示している。

参考文献

- 金賢娥 (2013) 「現代日本語における助詞「ト」の研究—引用の周辺にある「ト」を中心に—」筑波大学博士 (言語学) 学位論文
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 近藤泰弘・坂野収・多田知子・岡田純子・山元啓史 (2011) 「BCCWJ 複合辞辞書」(Ver.1.0)、科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備」辞書編集班・複合辞グループ
- 佐藤勢紀子・大島弥生、二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子 (2013) 「学術論文の構造型とその分布—人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に—」『日本語教育』154: 85-99、日本語教育学会
- 清水まさ子 (2010) 「先行研究を引用する際の引用文の文末表現—テンス・アスペクト的な観点からの一考察—」『日本語教育』147:52-66、日本語教育学会
- 砂川有里子 (1989) 「引用と話法」北原保雄 (編) 『講座日本語と日本語教育 第 4 巻日本語の文法・文体 (上)』355-387、明治書院
- 西川真理子・橋本信子・山下香・石黒太・藤田里実 (2017) 『アカデミック・ライティングの基礎—資料を活用して論理的な文章を書く—』晃洋書房
- 二通信子 (2007) 「外からの情報を自分の文章にどう組み込んでいくか—アカデミック・ライティングにおける引用の学習—」『日本語教育学会 2007 年度秋季大会予稿集』283-284、日本語教育学会
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子 (2009) 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会

早川幸子・古本裕子・苗田敏美・松下美知子・岡沢孝雄 (2007) 「文系学術論文における判断表現の使用実態」『金沢大学留学生センター紀要』10: 11-29、金沢大学留学生センター

藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院

藤田保幸・山崎誠 (2001) 『現代複合辞用例集』国立国語研究所

村岡貴子 (2014) 『専門日本語ライティング教育』大阪大学出版会

森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型—用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

山本富美子・二通信子 (2015) 「論文の引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究—」『日本語教育』160:94-108、日本語教育学会

資料

日本学生支援機構「平成28年度外国人留学生在籍状況調査結果」

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2016/_icsFiles/afieldfile/2017/03/30/data16.pdf